

S25 年 4 月 高津高校入学の頃

2023-4-13

野口幹夫

今どきの中学生が経験するような激しい受験勉強の記憶はない。それでも入試はあった、それが自分の中学（松虫中学）で行われたこともあって、それも緊張はなかった。それでも合格できますようにとその日の朝は中学校横にあった稲荷神社に神妙にお参りしていったことは確かだ。

金塚国民学校から同じ敷地内にできた仮校舎で新制中学阿倍野第 4 中学に横滑りで入ったときが何の感激もなかったように、高津高校に入ったときも、特別な感激はなかった。ただ立派な校舎にそれなりの威圧感を覚えたくらいであった。

1 年生は物理の大和久先生が担任だった。隣の席には終生の友となった安保公博君が座った。初めての大和久先生の最初の授業だけは妙に覚えている。黒板に赤い帽子の生徒が出てくる絵を描かれたと思う。はじめ



めは赤い帽子の子、2 番目も赤帽 次も赤帽、ずっと 20 番目も赤帽、ではその次に出てくる子は何色か？ それはわからないが、物理はそれを赤色と答えるのである。と教えを締められた。このような話だったが、へー物理ってそうなんだと妙に感心した。

それから津川先生が英語の先生だった。彼は特別な教科書を我々のために準備してくださ

ったのだ。題して“**Introductory English for Upper Secondary High School**“という小冊子だ。

その時は「そうか 我々の英語の実力では高津の英語にはついていけないのだ」と思った。

新制の学校制度の中で育ち、それも特別なんだとも思わずに過ごしてきた我々は、高校側にとっては、やはり特殊だったのだ。こんな教科書を、わざわざ高津高は準備して、我々を迎えてくれたのだ。それは相当な特別扱いなのだと、今になって振り返って思う。

学校の中に**上級生先輩**がいることも慣れないことだった。新制中学は1期生で上級生はいなかったのだ。高津に入って先輩がいると感じたのは新聞部に入ったときだった。先輩がいた。黒い制服を着ていないちょっと変わった先輩だった。お付き合いの仕方をわきまえなかった。1号か2号分は、お付き合いしたが、それ以降は平たく言えば先輩を抜きにして勝手に我々だけで高津新聞を作ったのだ。自分は松虫中学でも新聞部にいたのでそれができたのだ。

今から振り返って我々は良くも悪くも、やはり特異児の集団だったのではないだろうか。